

〔研究ノート〕

## エリザベス・ボーエンの *Hand in Glove* について

横 尾 元 意

### I

今回の講座\* は「短篇小説を読む」というテーマで進められておりまして、この時間は、御案内の通り、Elizabeth Bowen の *Hand in Glove* という作品を取り上げて参りたいと思います。ところで、まず大体の筋を紹介し、その後、若干の吟味と説明を加えるという手順で進めて行くことになりますが、もし、皆様方から、この短篇について、なんらかの理解と興味を引き出すことが出来ましたら、私の責任を果たしたものと考えたいと思います。

この *Hand in Glove* という短編小説の作者エリザベス・ボーエンは、1899年アイルランドのダブリンで誕生しますが、イングランドで教育を受け、1923年に結婚してからも、その各地を移り住んで、1973年に亡くなるまで10篇の長編小説と80篇ほどの短編小説を書きました。そして、その作品は人間心理の陰影を細やかに表現しており、James Joyce, Jane Austen, V. Woolf の系譜に属するもののなのです。しかしながら、彼女が幼児期を過したアイルランド南部のコーク州にあったボーエン家伝来の屋敷 Bowen's Court に強い愛着を抱いており、後半生をアイルランドで暮すつもりであったと言われています。その屋敷の近くには軍の駐屯地があり、ボーエンは自分の故郷をこの短篇の舞台設

定に反映させています。

時は1904年頃、アイルランドの南部にある住宅地域で、森におおわれた山腹に立つジャスミン・ロッジに住むトラバー姉妹、特に姉のエシルを中心に物語は発展していきます。彼女達は、活発で、催される舞踏会、ピクニック、テニス、クロケット、パーティーには大抵出席し、いないと穴のあいたようでした。ところで、この姉妹には、若い頃この地方で美人として鳴した出戻りの叔母 Mrs. Vary de Grey がいました。彼女の夫は騎兵連隊の隊長でしたが、その勤務地のインドで自殺してしまったために、彼女は心に傷手を受けて、しゃれた衣裳のつまった7個のトランクだけを持って、この屋敷に帰って来ていたのです。姉妹は既に両親を亡くしていたため、この叔母を社交の場に出るための付き添いの婦人に利用するのですが、叔母に奇妙な振る舞いが目に付くようになると、彼女を二階の奥の部屋に押し込め、屋敷でパーティーを開いたり、士官達が訪れた時には、その部屋に鍵をかけたものでした。そして、彼女らは叔母を医者に見せることもせず、他の人が近づくことも許さなかったのです。

ところで、彼女達はギターを弾き、言葉は魅力的で、意欲的な目の輝きをしており、教養・工夫の才、機敏さの故に、人に賢いトラバー姉妹として知られていました。

彼女達がかう出来たのも、実は、叔母の持ち帰った例のトランクの中身を勝手に利用していたためであり、しかも、そのトランクは叔母の居る部屋の真上の屋根裏部屋に置かれていたのです。

さて、この姉妹には、手袋の手持ちが三組つつしかありませんでした。それで、叔母の高価な手袋の入っていると思われるトランクに目を付けていました。しかし、このトランクだけは、引っぱっても道具を使っても、仲々、開かなかったのです。そのうちに、彼女達の手袋は、いよいよくたびれてきて、宵の舞踏会に出掛ける前には手袋の指先に付い

たじみをベンジンで落さねばならなくなりました。

ところで、彼女達は生来、整った容姿だったので、周りの人達から、その結婚について期待を持たれ、賭もなされ、また、双眼鏡で屋敷の門の方を覗き込んで出入りする男の名前を書き止めるものさえいたのです。やがて、イギリス全土にエシルとエルシーの名が知られるようになりました。

ある春遅く、姉エシルに決心する時が来ました。彼女は、連隊の士官ではなく、魚釣りのために近くの屋敷を訪れていたイギリス侯爵の次男フレッド卿に一目惚れをしてしまったのです。二人の仲は旨く行くかに見えました。でも、天候に水を差されることもありました。そんな時、叔母へところへ、お茶を持って行ってみると、エシルは彼女から「彼をものにするつもりか」と唐突に尋ねられます。叔母は姪達が屋根裏部屋のトランクから衣服を漁り、取り出して、鉄を入れたり、縫ったりしているのを知っており、積年の恨みを抱いていたのです。それ故に、助言してやろうと思っていたものの、エシルにうそぶかれると、彼女は盆のまま、その姪に向かってお茶を投げつけてしまうのである。しかし、部屋を出ようとした時、エシルは叔母の亡くなった夫の写真を目に留めたのが切掛けで思い直して、叔母から男の心を捕える秘訣を教えてもらおうと部屋に出入りするようになります。

ところで、エシルとフレッド卿の間は一進一退して、仲々、彼はエシルの手中に納りませんでした。しかも、不思議なことに、彼等と一緒に踊るとき、フレッド卿は彼女を腕を伸ばした位置で受け止め、顔も出来るだけ背けて踊るのです。そのうちに、ロンドンにフレッド卿の戻る日が近づいて来ます。しかし、彼は肝腎な点には触れようともしませんでした。

さて、自分の魅力でフレッド卿に迫っても目的を遂げられないエシルは、叔母の部屋に繁く出入りするようになり、妹のエルシーに疑念と嫉

妬を起こさせる程のものでした。しかし、叔母はエシルに軽蔑と冷笑をもって対応するのです。ところで、フレッド卿が、明日ロンドンに帰るという日になり、今宵の舞踏会にすべてが懸ってきました。エシルの頭の中はいろいろの考えが交錯していました。そして、いよいよ、出掛ける支度をする時刻になったので、どうしても自分の衣裳を着てみたいと言い張る叔母を手荒に寝かしつけ毛布を彼女に投げつけるようにして、エシルが部屋を出ようとした時、背後から「きっと仕返しをしてやるから」という声がするのである。

そして、支度をしているエシルに、彼女とフレッド卿との話しが進展しないのは手袋が原因であることをテニスの集りから帰った妹のエルシーによって知らされます。さらに、続けて、叔母の様子がおかしいと伝えられます。ところが、その確認のため部屋に入ったはずのエシルは、例のトランクの鍵の入っている袋を死んだ叔母の枕の下から持ち出して来て、妹には、叔母は転た寝しているにすぎないと言って、部屋に鍵をかけてしまうのである。そして、彼女は「摂理なのよ」とつぶやくと、鍵を使って欲しい手袋を探し始めるのです。屋敷は薄気味悪く静まり、鼠が飛び出して来ました。エシルは、手付かずのトランクに迫り、うわ蓋に二つ並んで付いている錠の一方を開けて、早く見たさに、他方を開けぬまま、角から手を差し入れて引っぱってみると、ブライダル・ベールの端と思われるものが出て来ました。彼女は、「フレッド卿は、もう私のものだわ」と思います。でも、そのベールは、引いても、それ以上出て来ませんでした。そして、逆に、少しづつトランクの中に姿を消していくのです。すると、次の瞬間、手袋が顔を出して行く手を弄るふうに見えたかと思うと、これも引っ込んでいきました。それで、エシルは、一瞬、たじろぎます。しかし、彼女が勇気を振り起して、もう一つの錠に触れようとした時、突然、うわ蓋が盛り上がり、錠が引きちぎれて、ひとりでにトランクが開いたのです。見ると、折畳んだブライダル・ベ-

ルの上に、透明の紙に包まれて何層にも重なった純白の手袋が乗っています。ところで、エシルがその手袋を握りしめたりしていると、さきほど見えた手袋が不思議にも、彼女の手を掴んだかと思うと、髪を掬めて前に引き倒して息を詰まらせ、仰むけに投げ倒したかと思うと、彼女の喉もとめがけて飛びかかったのである。きゃしゃな手袋は見る見る間に、強く大きくなり、その縫目がほどけるほどであった。こうして、エシルは窒息して死んでしまいます。そして、彼女は叔母と同じ墓に葬られることになるのです。

## II

短編小説は限られた紙面に最大限に作者の意図を盛り込まなければならぬ為に、第一に主題すなわちテーマが明瞭であること、第二に効果が適切で印象が鮮明であること、第三に全体的統一が厳密であることなどの特徴を持っている。

従って、まず、どのような方法と効果で、この小説が緊密に統一されているかを探ってみる必要があります。

読者に疑問を投げかけて、読み進ませて解答を模索させながら、必然と思えるクライマックスへ導く方法が見られる。その最初として、小説の冒頭で、華やかなトラバー姉妹の紹介とともに、インドから出戻った彼女達の叔母を導入し、しかも、その持ち帰ったトランクの数にまで言及している点が挙げられる。

Mrs Varley de Grey had returned from India with nothing but seven large trunks crammed with recent finery; and she also had been impaired by shock.

この続きで、その理由のひとつには両親を亡くしていた姉妹が社交の場に出るための付き添いの婦人の役を果すためであることが分りますが、さらに読み進んでみると、姉妹が叔母のトランクから衣服を引き出し、それに手を加えて社交場に着て行っていることが分ってきます。そして、彼女達の数少ない手袋が古くなってくると、一個だけ明かずに残っていたトランクに彼女らの注目が集まることになるのです。

また、叔母に関して言えば、彼女は姉エシルの予標であることが読者に分ってきます。エシルが叔母に近づき、ひっきりなしに枕元に居るのを異様に思っ、妹のエルシーは次のように言っています。

‘You don’t think you’ll kill her, Ethel?’ the out-of-it Elsie asked. ‘Forever sitting on top of her, as you now do. Can it be healthy, egging her on to talk? What’s this attraction, all of a sudden?—whatever’s this which has sprung up between you two? She and you are becoming quite hand-in-glove.’

そして、叔母は最期に多義的な ‘I will be quits with you’ という言葉をエシルに吐いて死ぬのである。

さらに、エシルは叔母のインドで死を遂げた夫を次のようにアドニスになぞらえている。

‘You’ve had it,’ said Ethel, turning to leave the room. However, she paused to study a photograph in a tarnished, elaborate silver frame. ‘Really quite an Adonis, poor Uncle Harry.’

また、叔母自身も自分をビーナスに喩えていると思える言葉を言っている。

‘You fool of a gawk,’ she said, and with such contempt !  
‘Coming running to me to know how to trap a man. Could you learn, if it was from Venus herself? Wait till I show you beauty.—Bring down those trunks!’

従って、読者はビーナスとアドウニスの悲恋物語への連想から、叔母と同じく、エシルがフレッド卿に思いを寄せても、結局、彼女が傷手を受けることを覚るのである。

読者に投げかけられる別の疑問に、何故、フレッド卿はエシルと踊るとき、出来るだけ腕を伸して、しかも、顔をそむけるのだろうかということである。これは、エシル自身もその理由が分りませんでした。

When they did take the floor together, he held her so far at arm's length, and with his face turned so far away, that when she wished to address him she had to shout—she told herself this must be the London style, but it piqued her, naturally.

これが、テニスの集りから帰って来たエルシーの報告で合点がいくのです。フレッド卿にとって、エシルの手袋から発するベンジンの臭いが堪らず、それ故に、彼等の恋も進展しなかったわけです。それで、何とかしてフレッド卿の心を掴みたいエシルは、当然、叔母の手袋がどうしても欲しいと思うようになります。

さて、話が前後しますが、エシルに対して吐いた叔母の言葉に、ど

うして、次のように said the voice と続いているのでしょうか。読者には幾分、奇妙に響きます。

It was time to begin on her coiffure, lay out her dress. Oh, tonight she would shine as never before! She flung back the bedclothes over the helpless form, heard a clock strike, and hastily turned to go.

‘I will be quits with you,’ said the voice behind her.

その理由が、その後、分ってきます。叔母さんが死んでいたのです。それで、この the voice が the dying voice という意味に受け取られ、どのように、叔母の「きつと、仕返しをしてやる」という言葉が実現されることになるのだらうと、恐いもの見たさも混った期待が、読者に搔立てられるのです。ところで、叔母の容体を確認するために部屋に入ったはずのエシルは、死んだ叔母の枕の下から鍵袋を捜して持ち出します。こうして、クライマックスへの状況が出来上がるのです。

このように、作者ボーエンは読者に謎解きをさせながら、当初、それほど気に留めないトランクに主人公エシルの運命が懸って行くように、個々の部分を緊密に連絡させて、畳掛けるように筋を進めているのです。

さて、エシルが、これ程まで執拗に叔母の手袋にこだわっても、どうして読者には自然の成り行きだと感じるのでしょうか。お金を工面して、新しい手袋を求めればよかったわけである。

ボーエンは、トラパー姉妹に次のような性格描写を与えている。彼女達にとって、ジャスミン・ロッジの唯一の傷と思われた出戻りの叔母を、自分達が社交の場に出るための付き添いの婦人として利用したこと



に言及したところで、こう表現しているのである。

—they were therefore left lacking a chaperone and, with their gift for putting everything to some use, propped the aunt up in order that she might play that role.

彼女達には、総べてのものを、何らかの用に役立てる才能があり、とりわけ、服に手を加えて、目を見張るほど上手に仕立てることが出来ると述べている。

Once more allowing nothing to go waste, they had remodelled the trousseau out of their aunt's trunks, causing sad old tulles and tarlatans, satins and *moiré* taffetas, to appear to have come from Paris only today.

作者は、トラバー姉妹が、どんなものでも無駄になることに我慢のならない性格の持ち主であると言って、読者に、彼女達に対して好意を抱かせながら、素知らぬ振りして、彼等が叔母のトランクの中の衣服を利用していることに言及しているのである。さらに、彼女達の容姿に触れて読者の想像を掻き立てながら、しかも、姉のエシルの方が際立った美人だと言って、読者の注目を彼女へ集中させるのである。そして、何気なく、彼女達は気が強いと作者は付け加えている。

They carried themselves imposingly, had good busts and shoulders, waists firm under the whalebone, and straight backs. Their features were striking, their colouring high; low on their foreheads bounced dark mops of curls. Ethel

was, perhaps, the dominant one, but both girls were pronounced to be full of character.

このようにして、作者ボーエンは、読者の思考に方向性を与えて、エシルが近親者への情愛を押し殺して一途に叔母の手袋を追いかけても、読者にはあまり違和感が生じないように工夫しているのである。

いよいよ、クライマックスへの準備が出来ました。ここに、フレッド卿との結婚に漕着こうと、今宵の舞踏会に賭け、叔母のまだ開いていないトランクの中にあるはずの手袋を求めて、その鍵を見つめるエシルがいます。彼女は言います。「これは、神の摂理である」(‘Providential!’)と。しかし、このような経験は、彼女にとって、初めての体験ではありませんでした。フレッド卿がエシルの前に、最初に姿を現わした時のことです。ボーエンはこう表現しています。

He first made his appearance, with the rest of the house party, at one of the more resplendent military balls, and was understood to be a man-about-town. The civilian glint of his pince-nez, at once serene and superb, instantaneously wrought, with his great name, on Ethel's heart. She beheld him, and the assembled audience, with approbation, looked on at the moment so big with fate.

さて、エシルには、もう時間がありませんでした。彼女は屋根裏部屋への階段を登って行きます。そこには、ボエの『黒猫』、『アッシュナー家の崩壊』またはフォークナーの『エミリアのバラ』を思い出させるような無気味な世界が広がっています。

All Mrs Varley de Grey's other Indian luggage gaped and yawned at Ethel, void, showing its linings, on end or toppling, forming a barricade around the object of her search — she pushed, pitched and pulled, scowling as the dust flew into her hair. But the last trunk, when it came into view and reach, still had something select and bridal about it: on top, the initials E. V. de G. stared out, quite luminous in a frightening way — for indeed how dusky the attic was! Shadows not only multiplied in the corners but seemed to finger their way up the sloping roof. Silence pierced up through the floor from that room below — and, worst, Ethel had the sensation of being watched by that pair of fixed eyes she had not stayed to close. She glanced this way, that way, backward over her shoulder. But, Lord Fred was at stake! — she knelt down and got to work with the key.

飛び出す鼠に怯えながら近づくエシルに向って、空になったすべてのトランクが、あぐり口を開け、バリケードを築いてひとつ残ったトランクを囲んでいる。その上部には、叔母のイニシャルが睨付けているかのように光り、影は分れて傾斜した屋根を指でまさぐりながら登るように見える。そして、叔母の横たわる真下の部屋から静寂さが床を突き抜け、エシルは、見開いた叔母の目で見詰められているような気持ちにおののいている。

作者は、事物に叔母の生命が宿るかのようにエシルの心象を擬人的に描写し、さらに、場面を立体的な構図で表現することによって真迫性を与えて、読者を靈氣ただよう世界に引き込み、次に起る超自然的大団円の成功を確保しようとしているのである。その個所はこうようになって

います。……

……

What was odder was, that the spotless finger-tip of a white kid glove appeared for a moment, as though exploring its way out, then withdrew. / Ethel's heart stood still — but she turned to the other lock. Was a giddy attack overcoming her? — for, as she gazed, the entire lid of the trunk seemed to bulge upward, heave and strain, so that the E. V. de G. upon it rippled. / Untouched by the key in her trembling hand, the second lock tore itself open. / She recoiled, while the lid slowly rose — of its own accord. ……

……

Down on her knees again, breathless with lust and joy, Ethel flung herself forward on to that sea of kid, scrabbling and seizing. The glove she had seen before was now, however, readier for its purpose. At first it merely pounced after Ethel's fingers, as though making mock of their greedy course; but the hand within it was all the time filling out …… With one snowy flash through the dusk, the glove clutched Ethel's front hair, tangled itself in her black curls and dragged her head down. She began to choke among the sachets and tissue — then the glove let go, hurled her back, and made its leap at her throat. ……

……

こうしてエシルは死んでしまうのです。……

ところで、読者はエシルよりも早く、彼女がフレッド卿の花嫁になりそうに見えながら、為り損うのを知らされているのです。……

勇気を振りおこして、エシルが鍵でトランクの片方を開けた時のことです。

She pulled out one pricelessly lacy tip of what must be a brideveil, and gave a quick laugh — must not this be an omen? She pulled again, but the stuff resisted, almost as though it were being grasped from inside the trunk — she let go, and either her eyes deceived her or the lace began to be drawn back slowly, in again, inch by inch.

というのは、彼女に結婚はさせぬと言わんばかりに、幾層にも重なった純白の手袋がブライダル・ベールの上に乗っていたのです。そして、その手袋の中から飛び出した手袋をはめた手によって窒息させられて死んでしまうことになるのである。しかも、その手袋は、彼女がはめるにはあまりにも小さいものだったのです。エシルは、これも「運命」と言うのでしょうか。彼女は黙するほかないでしょう。もはや、叔母と同じ墓に横たわる身なのですから。

Ethel Trevor and Mrs Varley de Grey were interred in the same grave, as everyone understood that they would have wished. What conversation took place under the earth, one does not know.

ここで、足繁く叔母の部屋へ出入りする姉に 'Forever sitting on top of her,' (「ひっきりなしに、彼女の枕元に座って」) と言った妹エルシーの言葉が思い出されます。エルシーは forever を「ひっきりなしに」という意味で使ったのですが、エシルが叔母と同じ墓に葬られた

ことを知った読者には、「永遠に」という意味にも響いてくるのです。さらに、叔母の ‘I will be quits with you’ という言葉が含む「私はあなたとおあいこになるだろう」という意味を、読者が確認することになります。

そして、この小説の表題 *Hand in Glove* も、「手袋をはめた手」であり、物語のクライマックスに着目すれば「手袋の中の手」であり、主人公エシルと叔母の関係から見れば「緊密な間柄」という三重の意味を持っており、テーマから考えても、題材から見ても適切な表題であることが分ってくるのである。

### III.

この短編小説は様々な面を持っており、悲劇の主人公にも似たエシルの破滅の原因も、彼女の「性格」、「運命・摂理」、「超自然的な力」などを列挙することが出来ますが、彼女をこれ程までに駆り立てるのには、もっと基本的な原因があるように思います。それは、イギリス社会の “Snobbery” というものです。石田憲次著『英国民性と文学』は、「スノッパリーと貴族制度」の章で次のように説明しています。

「スノッパリー (Snobbery) とは何であるか。N・E・Dの定義を見ると “the character or quality of being a snob” である。それではスノップとは何者であるかといふと、同じ辞書には、‘one who meanly or vulgarly admires and seeks to imitate, or associate with, those of superior rank or wealth’ とある。それでスノップとは要するに貴族崇拜者、上流模倣者と言ふので、スノッパリーとは貴族崇拜の風、上流模倣の慣はしである言って差支なからう。ではスノップ又はスノッパリーがかういふ意味に使はれるやうになったのは何時からであるかと言ふと、N・E・Dはスノップのかういふ意味の最初の用例としてサッカレーの「スノップ物語」(*The Book of Snobs*) (1848) を挙げゐるから、スノッパリーといふ現象が世人の特別の注意を惹き、世間で彼これ言はれるようになったのは、

サッカレーのこの有名な書物以後、即ちヴィクトリア朝以後の事であると言ってよるしからうと思ふ。

それでは、十七階級にも分れていると言われるイギリス社会の大体の序列を見る必要があるでしょう。H. W. Nevinson の *The English* (1928) によると、およそ、こういう階級組織になります。

頂点に国王を戴き、その下位に貴族がいる。その中に、広大な土地を所有する固有の貴族と、称号は持っていても多くの土地を所有しない貴族があり、しかも、後者は世襲の称号を保持した者と一代だけの称号を持つ者とに分れる。その下に Gentry と呼ばれる階級がくる。それも、Squires と Gentlemen に別かれ、前者の Squires は貴族と交流があり、相互の結婚も有り得る階層で、貴族よりは少ない土地を所有している。また、Gentlemen は、イギリスで最高の教育を受けた専門領域に活躍する人達で、多くは教会、裁判所、政府などにたづさわっている。その次に、中流階級がくる。これも、The Upper Middle と The Lower Middle に分かれ、前者は “The backbone of England” と呼ばれ、Gentlemen より金持ちではあるが、教育の点で比較すると劣る階層である。また、The Lower Middle は Upper Middle よりは少ない富を所有する人達なのである。この中流階級の下に The Work-people の階層があり、多くのイギリス国民はこれに属しているのである。

さて、小説に戻ってみると、エシル達のジャスミン・ロッジには駐屯地の若い士官達が出入りして、彼女は彼等の一人と結婚するものと思われていました。しかし、どうだったでしょう。

He first made his appearance, with the rest of the house party, at one of the more resplendent military balls, and

was understood to be a man-about-town. The civilian glint of his pince-nez, at once serene and superb, instantaneously wrought, with his great name, on Ethel's heart.

初めて、エシルがフレッド卿を目にした時、彼女は彼の甘い恋のささやきに心を抱えられたのではなく、メガネの上品な輝きと立派な家柄ないしは名声に心を引かれたのです。しかも、フレッド卿が積極的に彼女に言い寄った形跡也没有。

このような貴族崇拜、自分より上の階層への憧れとその階層の人達へ仲間入りしたいという願望は日本人には理解しがたいもののようです。この傾向は、現在の日常生活にも見られるようで、最近、出版された『スケッチ・イギリスの素顔』という小冊子にはこう述べてあります。

「ただの人」と少しでも違うときにその区別を怠ったら大変なことになりかねない。貴族やその子息、上院議員はロード××、その奥方や令嬢はレイディ××、ナイトに叙せられた人はサー××、その妻や娘はデйм××（または俗に括してレイディ××）とタイトル付きで呼ばれる。マーゴ・フォンティーンやアガサ・クリスティのように自分がデйм・グランド・クロス（男性のナイトに当る）に叙せられた女性はもちろん「デйм」が名前の前につく。

博士号を持つ人はドクター××と称しなければいけないし、講座制に以て教授ポストが非常に少ないお国柄だけに、その人が教授になればプロフェッサー××と称しなければ失礼になる。

従って、Snobbery がらみの短篇小説が出て不思議ではなく、他に幾つかの例を挙げることも出来ます。そのひとつが、Thomas Hardy の *Squire Petrick's Lady* です。主人公の祖父 Timothy Petrick が法律の知識を利用して、狡猾な手段で得た多くの不動産の相続に関わる話です。この祖父と同名の Timothy は、狡猾な家柄のために a country townsman of the professional class の娘と結婚し、やが



て子供が生まれました。ところが、彼の妻 Annetta は、自分の生んだ子供は Timothy の子ではないと告白し、その子に Rupert という名を付けて死んでしまうのである。それで、彼は、この子に財産を相続させまいとして直ちに、祖父に遺言状を書き換えてもらうのですが、Rupert という名が Marquis of Christmister のものであることが分ると、子爵令嬢との弟 Edward の結婚に嫉妬して、Rupert に貴族の血が流れていると思うと、Timothy は、極悪にも、秘かに祖父の遺言状を書き換えてしまうのである。しかしながら、Rupert には高貴な風貌は表われず、次第に自分に似てくるのを見て、それでもともとなのに、彼は自分の子供にいらだち怒るのであった。妻 Annetta が侯爵の子を生んだというのは、彼女の妄想に過ぎなかったのである。

別の例として、同じく Hardy の *The Son's Veto* を挙げる事が出来ます。さらに、D. H. Lawrence の *The Shades of Spring* にも、その傾向が認められます。それに、Katherine Mansfield の *The Garden Party* も、この方面から考えられると思います。

このように、Snobbery は、イギリス社会の一特徴であるばかりでなく、英国短編小説にも影響を与え、そのテーマともなり、また、根本的な背景を形成していると言えるのである。従って、英国小説を理解するうえで、視点のひとつと成り得るように思われます。

ところで、もちろん、この *Hand in Glove* という短編小説に、イギリス国民の他の属性を読み取ることも出来ますし、様々な批評分析方法で接近することも可能かと思えます。また、Elizabeth Bowen の他の作品との比較検討、さらに、同系列の作家群における位置付けも課題として残すことになってしまいます。

ともかく、この短編小説は、イギリス国民の特性を背景にして、構成も緊密な佳作であると結論づけることが出来るかと思えます。

\* 本稿は仙台英文学談話会主催による英文学公開講座「イギリス小説を説く」(昭和60年10月24日～26日, 東北学院大学)において, 「短編小説を構成するもの—E. ボーエンの『手袋をはめた手』を読む」と題して行った講演の発表原稿である。

#### 主要文献目録

- Classic British Short Stories*. Ed. H. Tanaka and K. Yokoyama. Seibido, 1978.
- English Short Stories by Women Writers*. Ed. M. Uchida. Asahi Press, 1983.
- Glendinning, V. *Elizabeth Bowen*, Penguin Literary Biographies, 1985.
- Modern British Masterpieces*. Ed. K. Kuzumi. Kinseido, 1977.
- Modern British Short Stories*. Ed. Tanaka and Yokoyama. Seibido, 1976.
- Nevinson, H. W. *The English*. Ed. T. Kuroda. 2nd ed., Seibido, 1973.
- 石田憲次, 『英国民性と文学』日本評論社, 1949.
- 元田脩一, 『短編小説の分析と技巧』開文社, 1959.